平成28年1月22日（金）陸奥新報（4面）

音声での病態分析研究

東大鄭教授 COI展開を解説

大弘

弘前大学と県、民間企業が連携して脳卒中や認知症の早期予兆発見、予防法開発に取り組むプロジェクトの研究拠点「COI拠点研究推進機構」事業の一環で、弘大は21日、同大大学院医学研究科で特別講演会を開いた。

東京大学COI研究総括で、東大大学院工学系研究科バイオエンジニアリング専攻の鄭雄一教授が講師を務め、「医学と工学の融合でかなえる『自分で守る健康社会』―東大COIの新たな戦略展開―」と題して講演した。

鄭教授は、健康医療データから個人ごとの健康・病状変化を予測し指導する―という東大COIの方針について説明。その一環として音声による感情・病態分析や、超音波による乳がんの超早期発見などの研究が進められていることを紹介した。

音声による分析では、通話の音声を解析して心の状態を可視化するストレスチェッカーが開発されており、これを使って長期的な心の状態のデータを累積できることを解説。また、家庭内で携帯端末を使って音声による病気の変化を分析、記録することで、外来時の診断の参考にできるとし、うつ病と脳梗塞の2疾患で研究が始まったことを話した。

（成田真矢）

東大COIの取り組みについて説明する鄭教授